

連の関東軍倉庫へ集まれとのこと。何もかも投げ捨てて、身支度もそこそこに其処を出発しました。倉庫には、もう皆集まっていました。我々の仲間はまた此処でも分散して十名足らずの半端者となり、本隊とは乗船も一日遅れてしまいました。

編成がまたあり、知らない部隊の後に続いたが、其の時の小隊長も見ず知らずの人で記憶から消えています。帰国後尋ねた戦友はもう亡き者が多く、長い間年賀状だけの文通の方が一名だけになってしまいました。

満州で終戦を迎えた部隊は、ソ連の不意の侵入、防御まだ完たかならぬうちに一方的に攻撃を受け、国境警備隊の多くは玉砕に近い犠牲をはらったのですが、内部の部隊、関東軍総司令部等からの、指揮命令が充分下達されず、混乱のうちに敗戦、ソ連抑留となったのです。その数六、七十万人と聞きました。

そんな状況の中で、私たちの抑留体験というのは特異なものであったといえます。我が隊が若し、ソ連の奥地へ連行されれば、私も酷寒の地、しかも給与の悪い中での重労働で内地の土を踏むことは出来なかった

かも知れません。

しかし、満州でのソ連抑留者で死亡した者も多かったのです。満州で逃亡したり満人の農奴となり、その行方も知れぬ人もいます。軍隊は連隊であり、特に終戦後の満州の軍人、一般邦人の惨禍はその人、その時、その場所で分かれたので、今でも私は良くぞ帰還出来たと思っています。

満州清明村開拓団

— 南方独混三七旅団通信隊 —

岐阜県 勝 智

私の戦時中の行動は、満州と南方ではありますが、満州では、清明村開拓団及び関東軍第八国境守備隊、南方は印度洋ニコバル諸島での通信隊（鍛第二五六八部隊）独立混成第三十七旅団）での戦務、終戦後はレンバン島抑留となります。

清明村開拓団と満州の軍隊教育

私は大正十一年九月二十九日、現在の恵那郡山岡町上手向で、農家の三男として生れて、尋常高等小学校卒業後、農林業に従事していました。

当時の農山村の青年の中には加藤完治先生のご思想や行動に私淑する者が多く、私もその一人で茨城県内原の日本国民学校に入校し教育を受け、埼玉県草加の農場に派遣されました。その後、学校本部は東京神田の岩本町にあったのですが、中野の電信隊の裏門の所の支部へ通ったのです。

そこには、加工した農産物や、山形の米、南瓜、北海道の馬鈴薯・牛乳・チーズ、和歌山蜜柑、信州味噌、林檎、醤油が送られていた。当時、東京は配給制度になったため、軍需工場や満州に行く者もあったが、学校は新しい組織を作り、清明村開拓団（本部―満州国新京（長春）特別区双徳区）を編成し、団長が戸谷義次さんで、日本へ来て受入れ準備していた。

私は十九歳で満州に渡りましたが、開拓の父、加藤先生の教えを受け、団員の一心同体の精神は年と共に開拓の成果を挙げる事が出来た。共同耕作で生産す

る作物を、共同販売で栄養のある新鮮な野菜を、安く新京市民に供給することに努めていた。

開拓団員一戸当りに配分される面積は五町歩で、しかも新京の近郊であるので現金収入にも恵まれ、経営も次第に楽になり、次々と花嫁を迎える明るさも増して、団員一同はこの地を永住の地と定め、村の中心地に清明神社を建設することとなった。

しかし、私は昭和十七年徴集兵なので、昭和十八年一月十日現地入隊したが、内地から来る人が遅いのでその間特別教育を受けていた。部隊は、ハイラルの関東軍の第八国境警備隊第五地区で、速射砲隊でした。初年兵教育は厳寒の中でしたので、その勤務の辛さは実際に体験した者でないと判らないが、対戦車の速射砲は、いわば弾よけで、歩兵より前であることを誇りとしていた。

一期検閲の後に奉天遼陽の通信学校へ入校した。しかし私は通信のことは知らなかったもので、勤務なしで技術の特訓を受けた。卒業の時は六番だったので「通信を全然知らぬ者が良くやった」ということで、昭和

十九年一月十日、第一選抜で陸軍上等兵に進級した。

ハイラルの公安嶺の冬季大演習があったのは、一月二十日頃で、その時に転属命令が出て、三月一日、黒河省孫呉の独立混成第三七旅団通信隊（鍛第二五六八部隊）に編入となった。

五月二十二日、インド洋のニコバル諸島派遣のため孫呉を出発。二十五日、鮮満国境通過、二十七日、釜山到着。同地で軍用馬を返納、六月七日、釜山港出港、内地博多に上陸した。

これまでが満州の行動略歴であります。

独立混成第三七旅団通信隊の南方戦務

門司で一晩がかりで荷を積替え、十一日、二十二隻ぐらいで船団を組み出港したが、鹿児島沖で敵潜水艦の襲撃を受け、鹿児島湾に緊急避難し、待機の後出航したのです。

ところがマラッカ海峡では連合軍の砲撃を受けた。しかし、その時は嵐になり、船のマストが折れたりしたが、敵も嵐のため攻撃が出来なくなり我々は助かった。貨物船の便所は甲板にあったので波に洗われ使用

も出来なかった。

船はマニラに着いたが、伝染病が発生したため一月近く上陸は出来なかった。その後、私はしばらく通信勤務をし、部隊は埠頭一帯の警備をし、八月七日、マニラ港出航、途中ボルネオ島ミリ港寄港。二十日、シンガポールに上陸、南兵舎に入り港灣警備、密輸船の取締りなどしていたが、その時埠頭では英軍捕虜が荷上げ作業をしていたのを見た。

十月九日、シンガポール港出航、ジョホール水道通過、クアラルンプール到着、二十日頃、スマトラ島テロクニボンへ行く時、先遣隊（宮本少尉以下三十二名）の乗った漁船改造船が、英国潜水艦の砲撃を受け沈没したため、戦死傷者十名程の損害を受けた。私は後発隊で、マラッカ海峡を横断し、二十八日、スマトラ島テロクニボン港上陸、タンジョンパレーを経由し、ペラワンに到着したのは三十日だった。

十一月十一日、ペラワンから鉄道で乗船地に向かう。十六日、コタラジャ出発、十七日、オレレ港を出航、いよいよ、ニコバル諸島に向かった。私は船舶工兵隊

の船で、二十日、カモルタ島ナンコウリ港に上陸し、旅团长佐藤為徳少将の指揮下に入った。

私たちは、そこで軍司令部との通信連絡をしていたが、その後は、カモルタ・ナンコウリ・トリンカット・カッチャル・テレッサ島などの各島の警備隊（各種の兵種あり）に通信員とし分遣された。有線も無線もバラバラでの通信勤務である。私は旅団工兵隊へ派遣され、終戦までそこで勤務していた。

昭和二十年七月末頃、英国軍機動部隊が接近、二日間にはわたり艦砲射撃・爆撃・銃撃を受けた。その間無線機には米軍の放送が入ってくる（傍受）。

「ドイツが降伏した。」

「B 29が日本本土を爆撃し全機無事帰還した」

とか、放送のアナウンサーは「私はハーバード大学卒業の斎藤タカシでございます」とか、いろいろな情報が入って来ていた。

我々は勤務者とし、それを外部に漏らすことはしなかった。その間、糧秣などは船で輸送出来ないのので、友軍の飛行機が衣料・食料等を投下してくれた時が

あった。

終戦の八月十五日以降の無線通信は暗号でなく、生（ナマ）で打って来た。「日の丸を消して青い十字の飛行機は友軍の飛行機で、連絡に行くが射つな」などであるし、兵器、書類の処分などの指示もあった。

ニコバル島での終戦前の状況を話してみるが、食料は自給自活の方式で、網を作り魚を取り、樽も作った。兵隊には内地でのそれぞれの職業、特業があるから何でも作って生活していた。島での作業中は襦一本（戦闘の時は服を着、戦闘帽に階級章を付けていた）。我々通信兵は椰子の木に登り実を取った。

先に申した英軍の艦砲射撃、爆撃の時、海軍には弾丸が四十発しかなくて反撃出来なかった。終戦の半年ぐらい前、ニコバルで演習をやった。この時、旅团长は「この戦争が勝つも負けるも半年だ。それまで半年生き延びよ」という訓示だった。旅团长は、兵隊の為に気を使ってくれていた。その言葉の通り、八月に終戦となったわけだ。

終戦後の状況と抑留生活

終戦後間もなく英国海軍が進駐して来た。彼等は先ず空砲を射って来た。日本軍が抵抗しないと見て上陸して来た。我が軍は白旗をかかげて英軍を迎えた。兵器を整理し、員数を点検し英軍に渡した。秘密書類や個人の軍隊手帳、写真などは、終戦時の指示に従って皆焼いてしまった。軍の中での混乱は余り無く死亡者は出なかった。

私は残務整理のため、五、六人の人と共に残った。その間、現地住民との交流を初めてやった。日本のお盆だが、首祭をした骨を飾ってあった。日本は負けたが、スポーツもやった。我々は幅跳、三段跳で勝ったので現地人から敬意を表された。

「日本人に来て貰わねば経済的にやれない」という現地人がいた。

「アメリカはアジアを征服出来ない。日本人がやらねば」と言う人もいた。この人は二・二六事件関係の皇道派の人たちだった。

作業が終わって、引上げの時、船は英軍の基地へ寄った。戦犯者収容の島でした。多くの人が別れのた

め棧橋に出ていて無言の面会が出来た。ここは東洋一の英軍の留置場、刑務所の島で、島に寄港したのは英国が特別に考慮してくれたのだと聞いた。

船はレンパン島に着き、そこで兵隊は収容された。私は通信だから、復員関係の通信業務をしていた。島の生活は自給自足であるが、私は復員事務をしていたために、通信隊では一番最後に上陸し、一番最後に帰国した。それは、レンパン島も段々と復員していつて、人数がすくなくなっていく、そこでも有線通信をやってくれというので自分から志願し、勤務した。

レンパンの自活とは、食糧作り、野菜作り、食事はさつま芋の蔓の雑炊、時には、アルミ缶に入った英国の携帯食糧（タバコ・ミルク・肉缶・パンなど入った三つ重ね）もあって驚いたり喜んだりした。塩は海水をドラム缶で煮て作った。

私たち通信は、一番最後まで他の部隊へ編入されたので、ある時、閣下がうどんを土産に持って来られた。その閣下の名前は忘れたが、その時は軍隊の時とは違い、閣下も兵も差別なく普通の話をする事が出来た。

私は、終戦の翌昭和二十一年六月十八日、内地帰還のためレンパン島を出航、七月六日、鹿兒島港に帰り、陸軍伍長として復員した。

戦後、通信隊の戦友会は、全国各地からの集まりで「戦友」という本を作って資料として配ったり、戦友会を各地持ち廻りで催している。また、内原訓練所関係の交流は、二年に一度やっていたが、高齢者が多くなり、今は打ち切って、思い出の文集にしてある。清
明村開拓団の人々は、ソ連参戦等で随分苦労したが、最後の引き揚げは昭和二十一年七月頃とのことなので、私がレンパン島から復員したのと同じ時期という。期せずして、北と南から内地へ帰還したわけです。
私は青雲の志を懐き、築土建設と民族協和のため、加藤完治先生を慕って満州へ渡ったことを忘れない。そして、犠牲となられた多くの開拓者の御冥福を祈ることを忘れておりません。

満州の衛生兵勤務

— 兄の遺児も幸せに —

滋賀県 西 岡 敏 夫

私は昭和十五年徴集、滋賀県甲賀郡甲南町で、大正九年十月九日に生まれました。父は小学校五年生の時、母は中学二年生の時死亡し、長兄は第十六師団、フィリピンのレイテ島で戦死、次兄は満州旅順で抑留し十二年四月に復員、私は三人兄弟の末弟の三男でした。
昭和十六年三月六日、現役兵として宇品港を出航、満州黒河省の瑗瑗に着いたのは三月十二日で、第六国境守備隊第二中隊に歩兵として入隊しました。一期検閲終了後衛生兵に転科、教育は瑗瑗陸軍病院で三か月間、衛生兵教育は看護婦並みで、三か月間に短縮されたので、夜も寝られぬ。寝ていると教育係に叩き起こされるなど厳しいものでした。ほとんどが学科で、その日の講義はその日のうちに試験する。教官は軍医で、